

404小隊 Ghost

ひぐらしの雫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

見つからない部隊が本当に見つからなくなった話。

ストーリーネタバレを含みます。ご注意ください。

後書きに解説という名の何かを入れました。興味があればご覧下さい。

目次

m i s s i o n 1 2	m i s s i o n 1 1
19	1

mission 1

戦場の一角にて。

二人の長い黒髪の女が対峙している。

どちらも美しく、場所が場所なら周囲の視線を引いただろうが、二人が持つものを見たらどんな人でも警戒せざるを得なくなるだろう。

一人は白く塗装されたアサルトライフルを構え、もう一人を狙っている。

一人は身の丈のほどの大剣を持ち、ハンドガンを構えもう一人を狙っている。

二人は何やら話しているようだった。その話を内容は大剣を構える女の顔の歪み具合を見れば、都合の悪い話をしていことがはつきりと分かる。

その女——処刑人はもう一人の女、M4A1に向かつて何か言ったようだった。先ほどとは打って変わり、嗜虐的な笑みで。攻守が入れ替わったようだった。無表情だったM4A1の顔にも怒りが見える。余程急所を突かれることだったのだろう。二人の衝突は時間の問題だった。

(……潮時だな)

もう少し二人の会話から情報を得たかったが仕方がない。最優先はM4A1の安全の確保である。

「カウント、3、2、1」

乾いた音が響く。

放たれた銃弾は処刑人のハンドガンを持つ手を捉え、その銃をはじき飛ばした。

撃たれた処刑人は驚きに顔を歪めるも、同じく銃声に反応し物陰に隠れようとするM4A1に接近する。処刑人の唯一の遠距離武器を失った今、スナイパーに対抗する手段がない。自分が撃たれたのならスナイパーはM4A1の仲間である可能性は高い。故に彼女を人質に取り、優位に立とうとするだろう。

そしてそれが、処刑人の運命を決めることとなる。

接近する処刑人を襲ったのは、M4A1の背後の物陰から現れた2体の戦術人形である。それらはサブマシンガンを連射し、処刑人の動きを妨害する。

処刑人は構わずM4A1を捕獲しようとするが、背後のスナイパーが自分を狙っている状況から判断、カバーすることを優先する。咄嗟のカバー先が正面と背後から身を隠せる場所であることから、処刑人の有能さがうかがえる。

だが、たがが鉄クズ一匹に、この小隊の相手は重すぎたのだ。

カバーした処刑人を次に襲ったのは、立ち並ぶ廃屋の天井からの榴弾だった。爆発

に煽られるように飛び出した処刑人に再び乾いた銃声が耳に届く。

処刑人が脳天に風穴を空けられたことに気づいたのは、走馬灯のように遅くなった時間の中であつた。

動きを止めた処刑人の体に銃撃が叩きこまれる。処刑人は怨嗟の声すら上げられなかった。

突然現れた部隊は、鮮やかに鉄血のハイエンドモデルである処刑人を鮮やかに始末した。その部隊の顔ぶれにM4A1は見覚えがあつた。

「404小隊……」

「M4、黙って」

銀色の長い髪をした人形、HK416がこちらを睨む。自身の姉妹銃であるM16を始めAR小隊に敵愾心を持つ彼女に、M4はいい印象は抱いていない。その命令のような言い方にむつ、としたがM4の隣にくつつくようにいる茶鼠色の髪をサイドテールに纏めた人形、UMP45が通信を始めたため、言われた通りにした。

「こちら45、荷物を確保。集合後、合流地点に移動します。45アウト。……皆、聞い

たわね」

部隊が頷くが、通信が聞けないM4は何がなんだかわからない。404小隊の目的さえ分からない。疑問が渦巻くM4は睨む416の圧力に耐えながら口を開いた。

「あなた達は、どうしてここに？」

「見て分からないのかしら。不本意だけど、任務であなたを助けるために来たのよ。そして、あなたを合流地点まで安全に運ぶ。あなたが知るべきなのはこれだけよ」

それきり、416は口をつぐんでしまった。他の人形も何も言わない。口を開いたら撃つぞと言わんばかりの416の表情を見て、M4は少し怯む。

だが、今度は別の疑問が浮き上がってきた。助けてもらった手前、怒らせることは避けたかったが、確認すべきことである。

「な、なぜ移動しないのですか」

口を開いた瞬間、目を見開いた416に引きながらも疑問を口にする。404小隊は4体の人形で構成される部隊と記憶している。全員が揃っている今、動かないのは自然であった。

「指揮官がまだ来ていないからね。11が寝るまでには来るから大丈夫だよ」

「ひどい……作戦中に寝るほどじゃない……ねむいけど」

「9、作戦中はリードと呼びなさい。怒られるよ」

了解、と栗色の髪のスインテール、UMP9が45の言葉に頷く。少し不満そうではあるが。そして同じく不満そうに空色の長い髪をした人形、G11が9に文句を言う。仲が良さそうだな、と思うM4は更なる疑問を氷解させるべく口を開きかける。彼女らの雇い主、作戦情報の交換などのこれからに関することや、指揮官の所属はどこなのか、ダミーを連れずに行動しているのは何故かのような作戦に関係ないことも聞いてみたかった。それに404小隊はAR小隊と同じ指揮官を不要とする部隊だ。疑問はたくさんあった。

足音が聞こえたのはその瞬間だった。反射的に銃を構えかけるM4を横から45が抑える。

「そんなに焦らないで。味方だから大丈夫」

その顔は微笑んではいたが、目が笑っていないかった。

圧力を感じつつも、銃を抑えられたM4は足音の主をたしかめるべく聞こえた方向を見る。現れたのは都市迷彩マントを着て、スナイパーライフルを装備した男だった。

かなりの重装備である。コンバットヘルメットとシユマグ、何やら青い光が灯るサングラスで顔を完全に隠し、マントから覗くのはプレートキャリアと呼ばれる防弾ベストだ。足にハンドガンを装備している。男、と言ったがそれを判別できるのは体格と声のみであった。

「ミズM4A1ですね。貴方を助けに来ました。404小隊のゴーストリードと言います。リードと呼んで下さい」

「あ、M4A1と言います。助けていただきありがとうございます。ええと、指揮官は貴方ですか？」

「この小隊の隊長という意味では、そうです」

グリフィンの指揮官ではないようだ。スナイパーライフルを持っていることから先程のスナイパーであることは察しがつく。つまり、M4と敵対する行為はしないだろう。警戒を解く。

だが、人形達と共に戦場に出て作戦を遂行する指揮官など聞いたこともなかった。ましては404小隊は謎の多い小隊である。その指揮官に興味は尽きなかったが、ここは戦場の真つ只中、鉄血の司令部に近い場所であるということはM4も理解していた。M4を助けにきた、ということはグリフィンの関係者ではあるだろう。また聞ける機会はあるはずだ。

「貴方を安全な場所へ連れて行きます。私の指示に従ってもらいますが、よろしいでしょうか？」

「分かりました」

「私の傍から離れないようにお願いします。ゴースト、固まって行くぞ」

その言葉と同時に人形達が動き始める。45と9が先頭、11がそれに続き、M4とリード、そして殿は416という陣形だ。

「どっへ？」

「この先にグリフィンの部隊がいます。合流し、貴方を引き渡します。警戒して、離れないように」

404小隊とM4は移動を開始した。

日が半身を地平線に沈める頃。

404小隊とM4は無事に廃屋だらけの町にある広場にたどり着いていた。ここが合流地点である。鉄血が占領する地域を抜けてきたが、この地域のボスである処刑人を倒したからか、鉄血の人形が目に見えて減っていた。

それでも、2回小隊との戦闘はあった。長い間補給を受けられなかったM4の弾薬は切れてしまったが404小隊はまだ余裕があるようで、戦闘も問題なく全員無傷である。

しかし、ここからが問題であった。合流地点には誰もいなかったのである。リードは

小隊にM4の護衛と周囲の警戒を命じたあと、通信を始めた。

「オーバード、合流地点に到着。ですがグリフィンがいません。状況は？ ……分かりました。このまま待機します。リードアウト」

「全く、お気に入りならもつといい部隊を送りなさいよね。合流地点には私達の方が距離があるのにこれだもの」

「そうだよ。隊は家族なのにどうして何だろう？」

「あの……」

「どうやらグリフィンの部隊は到着が遅れているようです。鉄血の妨害にあっているよ
うで、私達は待機を命じられました。貴方にもここで待機してもらいます」

「分かりました。今の私は役にたてませんから。こちらこそお願いします」

「ご心配なく。私達も仕事ですから」

待機を命じられ物陰にリードと共に潜んだM4は、憂鬱な顔をしていた。理由は先ほどの9が発した、家族という言葉でAR小隊のことを思い出したからである。

彼女らとは戦場で別れて以来会っていない。考える度に胸が痛くなる。憂鬱になる。心配になる。大丈夫だろうかという考えが頭を支配する。

「どうかしましたか？」

「……え？ ああ、ごめんなさい。何でもありません」

「大丈夫、すぐに家に帰れますよ」

リードはM4を心配して言っているようだが、今のM4に家族を連想させるワードは逆効果であった。憂鬱な顔を更に暗くしたM4に、リードは少し困った様子だった。リードを困らせるつもりがなかったM4は誤魔化すべく口を開こうとして、リードの空気が変わったことに気が付いた。

「ミズM4A1、静かにお願いします。……敵の数は？」

その言葉を聞いて、M4は気を持ち直す。自分がここで死ねば、自分を逃がすため戦ったAR小隊に顔向けできない。404小隊を頼るしかない状況ではあるが、出来ることなら何でもするつもりだった。

「くそ、鉄血が少なかったのはこのためか。オーバーロード、鉄血の部隊を発見。中隊規模です。グリフィンはまだですか。……分かりました。合流を目指します。リードアウト」

「もう……さいあく……」

11が悪態をつく。それで状況が芳しくないことを察したM4は、指示を仰ぐべくリードを見る。

「ミズM4A1、鉄血の部隊がこちらに向かっています。どうやら敵は部隊を集結していたようで、その大部分をこちらに差し向けたようです」

「そんな……」

中隊規模と言えば60人だ。それを弾薬がない人形1人とダミーを連れていない小隊が相手に出来るはずがない。M4の心に絶望が広がる。

「ですが幸いにもグリフィンもここから近い所にいるそうです。妨害を受けてはいませんが、複数の部隊を同時に動かしており、合流すれば勝算はあります。私達はそこまで移動します。傍を離れないように」

「でも……、ここで身を潜めるといふのはどうでしょうか？」

「先ほど戦った鉄血は哨戒部隊です。証拠に、鉄血はまっすぐこちらに向かって来ます。発見されるのは必至でしょう。このままではグリフィンの到着前に数で押しつぶされます」

「ですが……、いえ、分かりました。指示に従います」

「ありがとう。ゴースト、動くぞ」

「早く行きましょう。説明に時間を取られたわ」

「集中しろ、416」

既に陣形をとっていた404小隊と共に移動を開始する。日が沈み、暗くなってきた道は逆に好都合であった。鉄血が夜戦装備に変えていたらまずいが、M4は祈りながらリードについていく。彼女自身、何に祈っても効果などないと分かっていたが、それ

でも、幸運を祈っていた。

移動を始めてから1分も経たずにM4の祈りは壊された。

「コンタクト！」

「VIPを囲め、ダイヤモンドフォーメーション！」

45の叫びと同時にリードから指示が飛ぶ。それまで前方の安全確認のため先陣を切っていた9と45が下がり、11が左前に出る。数秒もかからず、M4とリードを中心とした陣形に切り替わる。宝石のダイヤをイメージした、重要人物を守る陣形だ。M4の腕をリードが掴む。

「挟まれてるぞ！ 撃て！」

スナイパーライフルを背中に回し、ハンドガンを抜いたリードが叫びながら飛び出してきた鉄血人形の頭を撃つ。それを合図に前と後ろからノーマル鉄血兵が続々と現れる。静かな暗い路地は一瞬で鉄火場となった。

「左だ！ 建物の裏に回れ！ 行け行け！」

「撃ち返して！ 押し込められるわ！」

「伏せてー！」

一番前に行く9が叫ぶ。その言葉に従おうとするM4よりも早く、リードに頭を押しえられ、積み上げられた遮蔽物に引きずられる。その遮蔽物に銃弾の雨が注いだ。

身を固くするM4の盾になるように前に出たリードは9、45、11と共に前方の障害を排除する。後ろを見ていたM4の目に敵が映る。その敵は手榴弾を投げようとしているようだった。叫ぶ前にM4の隣から銃声が響く。殿を務めていた416だ。

敵はそのまま倒れ、爆発が敵を押しとどめる。

「排除！ 移動するよー！」

45、9が前に出て確認後、再び小隊は陣形を取り移動し始めた。だが路地を抜けたあとも待っているのは鉄血ばかり。グリフィンは見えてこない。

「もう、敵おすぎ……！」

「頑張れ、止まるな！ 合流まであと少しだ！」

前方の敵は45と9が恐ろしい反応速度で撃ち倒し、後方は火力に優れる416が榴弾を駆使しつつ排除する。そして11とリードが撃ち漏らしと廃屋の影から現れる敵を無力化する。かすり傷は増える一方であるものの、いまだ小隊とM4に被弾はなく、着実に合流地点へと進んでいく。

だが、前方に茶色の装甲が見えた時、小隊は足を止めざるを得なかった。

「前方に装甲人形兵！」

「後ろもよ！待ち伏せだわ！」

M4にリードが舌打ちする音が聞こえた。そしてM4も心臓が跳ね、焦りが体を支配する。それもそのはず、小隊は徹甲弾を装備しているものがないからだ。無くても排除できないわけではないが、時間がかかる。そして足を止めるということは死を意味する。

だがリードは焦っていない。他の小隊メンバーも変わらない。その姿にM4は自分にならないものを見た気がした。気弱な自分が、リーダーとして持つものべきものを。45が微笑さえ浮かべながら声をかける。

「リード、指示を」

「建物の中に入るぞ。45、9、11は足止めしろ。416、弾は残してあるな？」

「了解、スモーク！立ったまま死ね！」

「フラッシュ行くよ！消えちまえ！」

「任せて。さっさと消えて……」

「私は完璧よ、抜かりないわ」

45、9、11が立ち止まり足止めする中、リードとM4、416は建物の中に入る。そして416は榴弾を建物の壁に撃った。

元はコンクリートとはいえ最早廃屋と言つていい建物である。放たれた榴弾は壁を破壊し、人が余裕で通れるほどの大穴をあけた。すぐさま416がくぐり、安全を確認する。

「安全を確保！」

「ゴースト集合！ 陣形を立て直せ！」

リードに押され、M4は穴をくぐる。そしてその後にはリード、11、9、45と続く。すぐさま元の陣形を取ると、前方に広がる森へと前進する。

爆発音がM4の耳に飛び込んでくる。後ろを振り向いたM4に見えたのは榴弾を撃つ416の姿だ。その撃った先は、先ほどの廃屋。

その爆発は穴をくぐろうとする装甲兵と、榴弾と銃撃にさらされた廃屋を吹き飛ばした。

倒壊する廃屋。見るも無残になったその姿は、M4の目には勝利の証のように見えた。

視線に気づいた416が口を開く。何かを言っているようだった。

爆発音がその言葉をかき消し、M4には何を言っているか分からなかった。だが、確認のため後ろを向いていたリードには416が何を言っているか、付き合いが長いため分かっていった。そしてそれが、M4の耳に聞こえていないことに幸運を感じていた。

何時かお前達に取って代わる。いつか……。

「M4〜！ 無事でよかったよ〜!!」

そうやってM4の胸に飛び込んだのはサブマシンガンを持っている人形、スコープオンだ。グリフィンの部隊である。

あの後撒く、とはいかないものの、距離を離すことに成功した小隊は、合流地点へと到達、そこでグリフィンの部隊と共に鉄血を迎撃した。鉄血もこれ以上は無駄と判断したのか、撤退を選択。周囲の安全を確保した瞬間、スコープオンが飛び込んだ、というわけだ。

M4はスコープオンの相手をしつつ、404小隊を見る。彼らは勝利に酔わず、黙々と陣地の端で銃の整備を行っているようだった。そんな彼らに、M4は近づいていく。

「あの、ありがとうございます。私がここまで来れたのは貴方達のおかげです」

「気にしないでください。こちらでも仕事ですから」

リードはそう返してくれる。彼らの雇い主には俄然興味があつたが、命の恩人を質問

攻めするつもりはなかった。

「へえ、あなたたちがM4を助けてくれたの？ 指揮官から聞いてるよ。何ていう部隊なの？」

「スコープオン、あまり彼らの詮索をしないであげて」

「そうして頂けると有難いです」

「ええ、気になるんだけど、でも指揮官も機密情報だつて言つてたし……、我慢するよ。M4を助けてくれてありがとう！ でもここでお別れらしいね」

「え？ そうなんですか？」

てつきり帰りも一緒だと思つていたM4は間抜けな声を上げた。帰りはグリフィンの部隊と共に司令部へ行くことになっている。長い間整備をしていないM4はついた瞬間からやるのが目白押しだ。暫くは施設から出てこれないだろう。その時にやることは決めていたのに、出ばなをくじかれた気分だ。

「あの、また会えますよね？」

「あれ、M4はどうしたの？ もしかして、気になっちゃうの？」

「そ、そんなんじゃないやありません！ その、リーダーのコツとか、身につけるべきものを聞きたかつたんです。私、一応ある小隊のリーダーをやっているのですが、あまり自信が持てなくて……」

「それじゃあ一つだけ。そんな大層なものではありませんが」

リードはそう言うのと、銃の整備をしていた手をとめ、M4に向き直った。

「どんな時でも焦らないようにする、というのは難しいです。不測の事態というのはいつでも起こるものですから。しかし、焦りを表に出さないように振る舞うこと、というのは出来なくもないです。それをやることから初めてみては？」

「焦りを表に出さない……」

思えば、移動中M4はよく焦り、それを顔で表現していた。対するリードは内面は分らないが、焦っている様子は見られなかった。M4とリードの違いの一つというのは明白であるとM4は感じていた。

「アドバイス、ありがとうございます。参考にさせていただきます」

「ええ、これから頑張ってください」

後ろからM4を呼ぶ声が聞こえる。どうやら帰りの準備が整ったようだった。最後にもう一度お礼を言ってから、M4とスコープピオンは去っていった。

グリフィンが撤退し、暫くあと。

陣地に装甲車が近づいてくる。それは陣地の端に止まった。404小隊が車の後ろから現れる。それをバックミラーで確認した運転手はバックドアのロックを解除した。その中には、弾薬、配給、夜戦装備が入っている。

「さて、諸君」

「任務続行だ。補給後、鉄血の司令部に戻るぞ」

mission 1—2

ブリーフィングルームにて。

ゴースト、今回の作戦は鉄血のハイエンドモデル、処刑人を暗殺、そしてメモリを回収することだ。我々は鉄血人形の解析を進めているなか、重要な情報を入手した。鉄血のハイエンドモデル、その中でも上位に位置する代理人の会話内容だ。

その会話のなかで、代理人は「計画」の指示がある人形に下した。我々はその「計画」に強い興味をもっている。その指示された人形の詳細は分からないが、現在最も活発に動いているスケアクロウ、処刑人、ハンターの三体に注目した。この内の一人のメモリを回収してもらうことになる。

当初は最も戦闘力の低いスケアクロウをターゲットにする予定だったが、グリフィンが攻撃、回収してしまった。ハンターは防衛網が固く、またハンター自信も高い索敵能力を持っている。君たちといえど見つからずにやる、というのは難しいだろう。見つければ勝ち目はない。鉄血に情報を与えないためにも、出来るだけ静かにやってみよう。隠密性を高めるためダミーを連れていくことも禁ずる。

よって、戦闘力は最も高いが防衛がハンターより薄い処刑人をターゲットとする。不

意を討てば君たちは無敵だ。処刑人は直情的な行動で知られる。君たちなら出来るはずだ。

また、君たちにもう一つ留意してもらおうことがある。この画像を見てほしい。

この人形はM4A1。グリフィンの特務部隊、AR小隊のリーダーだ。グリフィンはこの人形が余程大事らしく、見つけた場合、最優先で安全を確保するようにと命令を下している。そして、処刑人がいる地域にこの人形の目撃情報が多数確認されている。

我々の目的はメモリの回収だが、グリフィンの命令を無視するわけにはいかない。人形を見つけた場合、作戦をM4A1の救出任務へと変更する。またグリフィンに情報を与えることを避けるため、救出任務との並行作戦は禁ずる。君たちには昼夜作戦を遂行してもらおうことになるかもしれない。覚悟しておいてくれ。

君たちは暗殺を何度もこなしているが、今回のターゲットは別格だ。十分に注意し、作戦を成功へと導いてくれ。幸運を祈る。

補給が完了し、装甲車が去っていく。

「もうつかれた……かえりたい……ねたい」

早速1ー1が弱音を吐く。もう何度聞いたか覚えていないフレーズを小隊全員が聞き流し、同じく何度返したか分からないフレーズを4ー16が返す。

「早く終わればその分早く寝れるのよ。しつかりしなさい」

「そうだけど、あの人形のせいで夜になっちゃったんだよ。もうやだよ……」

「人に理由をつけるのは感心しないけど、あの人形のせいというのは同意よ」

目を吊り上げ、4ー16は吐き捨てた。そしてこちらに視線を向けてくる。その顔はやや不満げに見える。

「そういえばリード、妙にあの人形に優しかったわね」

「そうか？ 別に普段と変わらないと思うが」

そう言ったが、リード自身でもらしくない、とは思っていた。請われたとはいえアドバイスを送るなんて本当にらしくない。作戦中こちら側以外の人形、人間には必要なこと以外は喋らない、と自分に課しているのだが彼女相手には関係ないことを喋ってしまった。

理由は自分でも分からない。詰問しているような雰囲気を漂わせる4ー16から視線を外すと、45と目があう。その顔はいつもと同じ微笑みのように見えるが、嫌な予感がする。

「最初の合流地点で慰めていたよね。すぐに家に帰れますよ、って。優しいねーリード」

「へえ……」

「私にも言つてほしいな！　ねえ、お願い！」

「ねむい……」

作戦中というのにこれじゃ緊張感がなくなってしまう。何より面倒くさい。こつちが聞きたいくらいなのに、納得のいく説明できる自信などなかった。

「ゴースト、こちらオーバーロード。聞こえるか？」

「こちらリード」

いいタイミングで通信が入る。目で集中するよう促すと、皆渋々通信に集中した。

「補給は完了したな？　君たちには予定通り作戦を続行してもらおう」

「ターゲットの遺体はまだ司令部に？」

「分からない。鉄血に回収されている可能性は否定できない。だが危険を冒す価値はあ
る」

「了解。ゴースト移動を開始します」

「気を引き締めろ。鉄血の夜戦部隊が既に展開している。ダミーを連れていない君たち
では排除に時間がかかるだろう。見つからず、静かにやれ。通信終了」

「みんな聞いたな、動くぞ。PEQをオンラインに」

小隊が16 L A B製のPEQを起動する。リードはかけているサングラスについているスイッチを押しした。見慣れた数列が並び、初期化、起動完了の文字が流れ、視界の右上にミニマップが表示される。右下には現在装備しているハンドガンのマガジン内の弾数、所持している弾数、グレネードの残数が表示され、目標地点への距離と方角を示す青点が3.3 km先に現れる。

このサングラスは16 L A Bの特別製である。視界に様々な情報を表示する上、ナイトヴィジョン、もしくはマグネティックビューワーの機能をつけることができる優れものだ。小隊の人形達にも同じ機能が視覚野に搭載、リアルタイムで更新されているが、ナイトヴィジョンは別で装備している。そこまでの容量がない、という話を聞いた気がするが、何故かはうろ覚えだ。

陣形をとれと命令しようとした時、416がこちらに近寄ってくる。

「指揮官、あとでね」

呟くように小さな声をリードは努めて聞き流し、ゴーストに指示をだした。

「敵よ」

前方を行く45の言葉に小隊は近くの遮蔽物へと隠れる。

「ドローン配置」

11がドローンを飛ばす。通常のドローンとは違う、ステルス性を高められたものは150m先を歩いている鉄血人形兵の小隊に気づかれず、上をとることに成功する。

「4人、装甲、ショットガン2、アサルトライフル2」

「近くに敵影は？」

「なし。マークするよ」

11はデバイスを操作し、リードの視界に1、2、3、4のマークが表示される。「了解。狙いやすい位置に移動する」

416の言葉と共に、11以外の隊員が音もなく移動する。それぞれが位置についたあと、

「捉えた」

「いつでもいいわ」

「指示を」

「いつでも」

「撃って」

全員が頭部に照準を合わせたことを報告したあと、間髪入れず11が指示を出す。サ

プレッサーごしの乾いた音が響いたあと、立っている鉄血人形はいなくなつた。
「クリア。先に進むぞ」

リードの指示で小隊は陣形をとり、再び移動を始める。暗い森は静けさを取り戻し、森は小隊の痕跡を隠してくれる。これで2回目の遭遇である。今のところ、問題なく目標へと進めていた。

全員が黙って移動する。作戦中はみな真面目である。元より気を張っている416はともかく、11も作戦中は普段の気怠さを全く感じさせない。その分、作戦のインターバルではだらけきっているが。

聞くと早く寝たいためにやっているという。オンオフの切り替えがちゃんと出来ていて何よりだ。目が一番いいため、ドローンも彼女に任せている。

「コンタクト」

9の声に小隊は再び隠れる。敵を確認すべく遮蔽物から顔を出したリードの目に入ったのは見覚えのある人形だった。

「待て」

11が同じようにドローンを出そうとするとところを止める。

「あれはグリフィンの人形、先ほどのスコープオンだ」

小隊がリードの言葉を聞き、確認する。そこには先ほどの人形、スコープオンと他4人の人形がダミーを連れて行軍していた。編制拡大を二度済ませているようだ。

ドローンを配置して見つかった場合、装備を見ているスコープオンにこちらの正体がばれてしまう恐れがある。

故にドローンは使わない。

「センサー配置」

リードは腰につけているセンサーグレネードを起動し、効果範囲のぎりぎりを狙い投げる。静かな森とはいえ、その音はグリフィンに伝わらず、気づいていない。

センサーグレネードとは、効果範囲内の敵性存在を検知、視界に表示するものである。配置するだけでバッテリーが切れるまで働くため、隠密にも戦闘時にも有用性がある。

「サブマシンガン1、ハンドガン1、アサルトライフル1、ライフル2よ」

「そのまま待機」

45が敵の部隊編制を報告する。リードは指示を仰ぐべく通信を開始した。

「オーバードロード、こちらゴースト。グリフィンの部隊を発見。方角からして鉄血の司令部に向かってるようです。どうしますか？」

「排除することなく、君たちがやったと思わせることなく、陽動するんだ」

「了解。実行します。リードアウト」

通信を切り、目的のものを取り出す。

「皆伏せろ。グリフィンの部隊の実力を見てみよう。陽動グレネードを投げる」

小隊が草むらの伏せたのを確認したあと、グレネードを投げる。グリフィンの背後に落ちたそれは着地と共にフレアのように音と光を出す。

リードもすぐに草むらも伏せる。光に集まる蛾のように、暗い森で音を出すと集まるものがある。

「敵よー」

そう叫ぶグリフィンの人形の声が策が成功したことを伝えてくれる。そして激しい銃声が響く。グリフィンは迎撃を選択しようだ。

リードは小隊に見えるように手を上げ、ハンドサインで移動を指示する。それを見た小隊は伏せたまま、目標地点へと移動を始めた。近くを通り過ぎる鉄血人形の足音も聞こえるが、眼前で繰り広げられる戦闘の方に気をとられ、小隊に気づくものはいなかった。

撤退を告げるグリフィンを尻目に、小隊はゆっくりと、確実に目標への距離を縮めていった。

戦闘もなく、見つかることもなく司令部付近に到達した。

「それで、グリフィンの狙いは何だったの？」

「俺たちと同じ目的、そうでなくても情報搜索のため司令部に行くだろう」

「そうだろうね。まあ、いい罠にはなってもらったから感謝しないと」

「あとで表彰メダルをやらないとな。……集中しろ。センサー配置」

「ドローン配置」

近くの廃屋の天井に身を隠す。司令部にセンサーを投げ込み、ドローンで探知しきれない部分を探索し、隅から隅まで確認する。

戦闘を覚悟したものだ。さすがに司令部がもぬけのからというのは考えづらい。リスクを払うことで、屋内での不意打ちの危険性を少しでも減らす。誰か1人でもダウンすれば全滅の危機であるこの小隊では仕方のないことである。

だが、その考えは思わぬ方向で裏切られた。

「敵影が確認できない」

「……こつちも。ターゲットもだよ」

「ゴースト、固まっていくぞ。これから司令部に踏み込み、安全を確保のうえ、ターゲットを回収する」

リードの指示で小隊が動く。廃屋の天井から降り、集結後司令部に互いをカバーしながら踏み込んだ。

念入りに時間をかけ、クリアリングする。だが敵影は見つからない。明らかに異常な状況である。

「だめ、敵どころかターゲットも見つからない。鉄血はグリフィンの方に行ったのかな？」

「嫌な予感がする。リード、早くここを出しましょう」

「オーバードードへの通信は外で行う。ゴースト、すぐにここから離れるぞ」

さつきと同じ場所では司令部からあまり離れていない。司令部から100mほど離れた廃屋で身を潜めることに決めたリードは、小隊に指示する。

45の言う嫌な予感というのはリードも感じていたが、それ以外にもリードは見られている感覚を覚えていた。だが、この場所は念入りにクリアリング済みである。もちろん、監視カメラなどの電子機器によるものも疑ったが、それらしいものを見つけることができなかった。リードとしては後ろ髪を引かれる思いではあったが、何もなく、ターゲットもない以上、長居は無用だ。

すぐさま小隊は互いをカバーしあい、司令部から離れた。

無事に潜伏先へと移動した。

「オーバーロード、こちらゴースト。ターゲットなし」

「くそ……遅かったか。了解、君たちの位置を確認した。そこから300mほど南へ行つた先にグリフィンが占領した陣地がある。だがグリフィンは撤退したようだ。そこに迎えをよこす」

「了解、移動します。リードアウト」

「やったあ、やつとかえれる……」

「最後まで気を抜かないで。撤退したということは鉄血が来る可能性があるのよ」

「416の言う通りだ。先ほどの司令部のこともある。鉄血が来る前に急ぐぞ」

無事帰るまでが作戦である。その点について416は間違っていない。だが、間違えているのは小隊の方ではなかった。

待ち伏せを警戒しながら進む小隊をあざ笑うかのように、帰還地点まで何もなく到達する。部隊を襲う時は作戦目標を達成し油断しているところを待ち伏せするのが定石である。この小隊は油断などしないが、気を張っていたリードと416にはいい肩透かしだ。

そうなると先ほどのことがもつと不気味に思えてくる。さらに帰還中の通信がリードが感じる予感を加速させた。

「鉄血が撤退していた？」

「そうだ。君たちが陽動したグリフィンの部隊をこのエリアの隅に追い込み撤退させたあと、そのまま撤退したようだ」

「どのタイミングですか？」

「君たちが司令部に到達するころにはすでに。目的はわからない」

「ターゲットの回収を完了、撤退するまでに私達が間に合わなかった、と考えれば筋は通りますが……」

「ああ、だが不気味だ。君たちの存在に気づいていないとはいえ、疑問が残る。こちらでも調べてみる。次のターゲットはハンターになるが、相変わらず防衛網が固い。指示があるまで待機しておけ。通信終了」

「何かこわいね……」

「鉄血が目的としていることが分からない以上、ここで考えてもしょうがないよ。それより、休ませてもらえるみたいだね」

「ああ、指示があるまで待機だ。家に帰るぞ」

「ねだめしなきや……」

「メンテが先よ。一日中動いたんだから。問題があるかもしれないわ」

「ええ……やだ、やっというてよ」

「自分でやりなさい」

そんないつもの掛け合いが終わり、小隊は会話を始める。作戦は成功とは言えないが、全員生還できた。ふう、とリードの口から息が漏れる。M4に偉そうにアドバイスした身だが、作戦中は緊張、心配の連続である。気が完全に抜けてしまったリードはぼんやりと車窓から流れる景色を見ていた。

「しきかぁーん」

間延びした45の声で意識が戻る。見ると、全員の顔がこちらに向いていた。

「何か忘れてない？」

この後めちやくちや絞られた。

暗く、殺風景はどこかの場所です。

映像を見ていた髪がツインテールで黒のセーラー服を着た少女は新たな自分への命令を確認する。

内容はある小隊の破壊、そしてリーダーの捕獲だ。ターゲットの情報として送られてきた映像には、鉄血の司令部に突入しクリアリングを行う小隊が映し出されていた。

そのうちの1人、他の人形とは明らかに違うものに少女は注目する。青い光を灯したサングラスをかける男は、人形達に指示を出している。

「4^G0^h4^o小^s隊^tか……」

「せいぜいわたしが破壊するまで死んでくれるなよ」